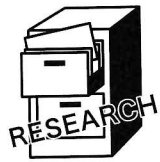


教員の「自信」はいつ確立？

●中央教育研究所の高校教員意識調査(上)



公益財団法人中央教育研究所(谷川彰英理事長)が「高校教員の教育観とこれからの高校教育」をテーマに行った調査の結果をまとめた。大
学入学共通テストが2020年度に導入され、ま
た、政府の教育再生実行会議が高校普通科の画一
的な教育を見直す提言案をまとめるなど、このと
ころ教育改革のターゲットとなっている高校。こ
れに対し、一方の当事者である高校教員の意識を
探った同研究所のアンケートの結果から、2回に
わたってお伝えする。

同僚アドバイス「役に立つ」97%

【調査の概要】アンケートは、17年10月11日、
全国の公立普通科高校約3800校から無作為に
選定した350校に対し、各校7人の教師に回答
を求める形でアンケート用紙を送付。764人の
回答を得た(回収率31・2%)。

回答者の内訳は男性7割、女性3割。年齢別で
見ると中堅層以上の50代以上(37・8%)と40代
(26・8%)で6割強を占める。20代は14・4%、
30代は21・0%だった。
役職については管理職11・1%、主任38・9%、

役職なし49・3%。また学級担任をしている人
36・0%、部活動・サークル顧問87・6%だった。
担当教科別では数学17・3%、外国語(英語)
15・7%、国語14・7%、社会14・1%、理科
14・0%、保健体育12・0%——となっている。
この他、教員養成系学部出身者27・1%に対し、
一般大学卒が72・8%。現在の勤務校が「4校目
以上」という回答者が多く51・7%だった。「転
職を考えたことがある」28・0%に対し、「ない」
71・6%。多忙感については「とても忙しい」
37・0%、「かなり忙しい」56・2%に対し、「あ
まり忙しくない」5・8%、「忙しくない」0・
3%だった。
勤務先の高校の属性については「大学進学者
30%以下」が37・7%、「31〜50%」が13・6%、
「51〜79%」が21・1%、「80%以上」が26・
4%となっている。

【教師としての自信】「教科の指導」「生徒指導」
「進路指導」の三つについて、自信が持てるよう
になった時期を聞いた結果を見ていく。全体では
「まだ自信が持てない」という回答割合が3割強
から5割弱と多いが、それを除くと教科指導と生
徒指導については「4〜7年」で自信が持てたと
いう回答(約27〜30%)が多い。進路指導ではや
や遅れて「8〜10年超」の約28%が目立つが、
「まだ自信がない」が47・0%とほぼ半数ある。
生徒の進路を考えるのに相応の教師経験が必要と
なるのは至極当然かもしれない。調査報告書は
「困難度の高いほうから、『進路指導』生徒指導
▽教科の指導」の順であることがはっきりとわか
る」と記す。(数字は%、上から「1〜3年」「4
〜7年」「8〜10年超」「まだ自信が持てない」)
▽教科指導 10・6 30・0 23・6 33・5
▽生徒指導 7・6 27・4 23・7 39・7
▽進路指導 2・5 20・3 27・6 47・0
【仕事観など】高校教員としての仕事は、当事
者たちには一体どのように考えられているのだろ
うか。次の5項目が「とても」「まあ」を合わせ
た「そう思う」の割合が多かった。(数字は%)
▽精神的に気苦労の多い仕事だ 97・4
▽とても多忙な仕事だ 96・6
▽生徒と接する喜びのある仕事だ 96・0
▽体力のいる仕事だ 95・0
▽専門に関して高度の知識が必要な仕事だ 93・5
▽やや様子が異なるが、「経済的に恵まれた仕事
だ」計61・8%、「とても」「まあ」別では各7・
2%、54・6%、「社会的に尊敬される仕事だ」
計61・4%(同6・3%、55・1%)という結果
も相応のものと考えられる。
細かく見ると「経済的」に対する肯定的回答は
女性に多く(計71・4%)、年代別では「40代」

計67・3%が高い。「社会的」については男性計63・5%、年代別は「50代以上」計64・7%、役職別では「管理職」計71・8%が高かった。

仕事をしていく上で何が役立つと考えているかを項目を挙げて聞くと、「同僚からのアドバイス」で肯定的回答が圧倒的に多く、「とても」46・3%、「ある程度」50・7%の計で97・0%。

これに対し、「校長、教頭からのアドバイス」は同様に26・2%プラス60・7%の計86・9%。また「学校としての組織的取り組み」27・9%プラス55・8%の計83・7%。「公的な研修」は10・6%プラス61・8%の計72・4%でやや低い。

高校教員はどんな授業（法）を大事に考えているか。大所は二つで、まず「基礎的な力のつく授業」82・3%プラス17・1%の計99・4%、次いで「生徒が興味や関心を持てる授業」75・5%プラス23・4%の計98・9%。

一方、「受験に対応した授業」34・6%プラス51・8%の計86・4%、「アクティブ・ラーニング」28・0%プラス56・5%の計84・5%だった。また「職業に結びついた知識や技能が得られる授業」26・4%プラス55・5%の計81・9%、「デジタル教科書やデジタル教材を取り入れた授業」9・4%プラス51・0%の計60・4%だった。

多忙なほど偏差値に頼る傾向

【進路指導の現状】調査報告書がそもそも「教員の指導力が問われる非常に難しいもの」とする進路指導は、多忙化が進む高校現場でどのように

行われているのか。特徴的なところを見ていく。多忙感を訴える教員712人とそうでない（非多忙）教員46人の比較をすると、進路指導の仕方はどう異なるだろうか。次に示すのは「進路指導の際に重視すること」を項目を挙げ聞いたもの。「生徒の学力（偏差値）」に頼りがちな様子が見て取れる。（数字は%）

	「多忙教員」（非多忙教員）	「計」
▽生徒の希望	98・2	93・5
▽保護者の希望	60・5	54・3
▽教員としての判断	28・9	32・6
▽生徒の学力（偏差値）	65・9	50・0

生徒の状況をどう見ているか。「卒業後の進路を自分で決められない生徒が多い」という項目で「とても」「やや」を合わせた「感じる」の回答割合は、4年制大学進学率が低い高校ほど多い傾向を調査は捉えている。（数字は%）

	「とても」	「やや」	「計」
▽4年制大学進学率30%以下	30・9	54・5	85・4
▽31〜50%	32・7	54・8	87・5
▽51〜79%	23・0	60・2	83・2
▽80%以上	13・9	56・9	70・8

自分で進路が決められない、そんな生徒が大勢いるという教師の回答が、大ざっぱに見て8割前後。一方で教師は多忙を極めるわけだから、進路指導の現場は寒々としたものにならざるを得ない。生徒の「希望」を言うがままに聞か、偏差値に

よる機械的な進路指導を行うか。公立中学校で業者テストの偏差値を使った進路指導が行われていた1990年代前半の光景を思い出す。教師が専門的判断を示さないという意味で高校でも同じような問題が広がっているのだろうか。

「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒が増えている」という項目はどうか。肯定的回答をした教師は、大学進学率別に「30%以下」の高校のものが計88・5%。以下同様に「31〜50%」が78・7%、「51〜79%」が62・8%、「80%以上」が46・1%という結果だった。

【高校間格差】ここでは4年制大学進学率を5段階に分類して集計。ちよつと特徴的なデータがあった。

「海外への進路に興味を持つ生徒が増えている」の項目で肯定的回答をした割合が高かったのはVタイプ（4大進学率が80%以上で難関大学11%以上の「超進学校」）の42・4%だが、Ⅲタイプ（4大進学率51〜79%の「準進学校」）やⅣタイプ（同80%以上で難関大学10%以下）も各32・3%、23・2%とまとまった数値を示し、進路（意識）の多様化が幅広い高校で見られると言えそうだ。Iタイプ（4大進学率30%以下）、IIタイプ（同31〜50%）でもそれぞれ10・1%、16・5%あった。「理工系の進路を選ぶ女子生徒が増えている」で肯定的回答が多かったのはやはりVタイプの58・6%だが、ⅢとⅣもそれぞれ26・1%、33・0%だった。

（矢内 忠教育ジャーナリスト）